



木を植えることから始める天空の森の芸術祭
「フォレストアートフェスティバル in ラダック 2024」
キックオフイベント 「芽吹き of 宴」

とき 2024年5月29日(水)
会場 貝印株式会社1階「カイハウス」
主催 NPO 法人ウォールアートプロジェクト
協力 貝印株式会社

問い合わせ先

NPO 法人ウォールアートプロジェクト

<http://wallartproject.net>

info@wafes.net 090-2328-0230(おおくにあきこ)



香川大介
「またここに還る」
2023

「フォレストアートフェスティバル」とは

北インドのヒマラヤの標高 3800 メートルに位置するマトー村を会場とする国際的芸術祭です。村は、マトー山頂に積もる雪が地下に深くもぐり、そこかしこに小川となって湧き出ている美しい緑のオアシスです。「マトー」の語源は、ラダック語で、「たくさんの幸福」を意味しています。この村で 2017 年から学校を舞台にした芸術祭を開催し、アートの力を伝えてきた東京の NPO 法人ウォールアートプロジェクトが、植樹とアートを融合した新しいアートプロジェクト「フォレストアートフェスティバル」をスタート。プロローグとして開催した昨年は、6100 本のヤナギとワイルドローズの苗木をチベット寺院の敷地に植樹しつつ、アート作品を制作しました。

その植樹地を舞台に、7 月 19 日から 8 月 11 日にかけて、「フォレストアートフェスティバル in ラダック 2024」を開催します。日本から 6 名、インドから 1 組のアーティストがラダックへ集結し、3 週間の滞在制作を行います。昨年交流を深めたラダックのアーティストと協働し、そこでしか作ることができない作品に挑みます。また、マトーの村人をはじめ、周囲の村やレーの街、インド各地からも協力の手を募ります。さらには、現地を訪れることはかわいけれど、参加したい、応援したいというみなさんの力を苗木の寄付やクラウドファンディングで結集して、ウォールアートプロジェクト 15 年間の経験値全てを注ぎ込む一世一代の「天空の芸術祭」を作り上げます。

各アーティストの作品は、現地に残るものもあれば、その場限りのものもあります。重要なのは、その場に居合わせるみんなが持てるものを交換し合い、アート作品が生まれる熱量を共有することです。マトー村のアートの森を、みんなで作る、誰のものでもない、希望を感じられる森にしていきます。

いよいよキックオフ！

キックオフイベントは、6 人の参加アーティストが勢揃いしてラダックのフェスが船出するローンチパーティーです。

会場は、協賛企業・貝印株式会社 1 階カイハウス。参加アーティストたちの作品展やパフォーマンスも行います。ウェルカムチャイの試飲やラダックの伝統食モモの試食など、ラダックでの芸術祭を体験していただける盛りだくさんのイベントです。

* 18:30~ のトークイベントにご参加の方のみ、準備の関係で予約制となります。ご予約、お問い合わせは下記ウォールアートプロジェクトまで。

【とき】 5 月 29 日（水）16:00~20:30

【ところ】 貝印株式会社カイハウス

東京都千代田区岩本町 3-9-5 1 階 地下鉄都営新宿線岩本町駅下車 A4 出口徒歩 1 分

【登壇アーティスト】 浅井裕介（美術家）・香川大介（画家）・スギサキハルナ（美術家）・富松篤（彫刻家）
・花田千絵子（コンテンポラリーダンサー）・RRyusuque（ハンドパン奏者）

【参加費】 無料

【参加予約・問い合わせ】 Email info@wafes.net

【主催】 NPO 法人ウォールアートプロジェクト

【協力】 貝印株式会社

【タイムスケジュール】

16:00 開場 フォレストアートフェスティバル参加作家展覧会スタート

インドの手仕事「ツォモリリ」販売スタート

18:00 ハンドパン奏者 RRyusuque ミニコンサート *ウェルカムチャイを片手にご参加ください。

18:30 トークイベントスタート *途中、ラダックの伝統食モモの試食タイムがあります。

20:30 終了

20:45 閉場

【NPO 法人ウォールアートプロジェクト概要】

2009 年に任意団体として設立。2011 年に法人格取得。設立以来インド農村部及び日本の学校を舞台にした国際的芸術祭を 18 回開催。加えて、2023 年に Forest Art Festival としてアーティストの滞在制作作品及びワークショップで完成した作品を屋外に展示する事業をスタートした。日本、インド、ドイツ、フランスのアーティストを招聘し、これまでに壁画を中心とする絵画 66、インスタレーション 25、映像 8、パフォーマンス 6 が生み出されてきた。基本的に制作過程が公開され、ワークショップを介して子どもたちや一般の人々を取り込み作られた作品も多い。活動の目的はアートの力を伝え、アートを媒介にした交流を生み出し、アイデンティティ深化や国際理解に寄与することである。

【フォレストアートフェスティバル in ラダック 2024 共催

ラダック自治山間開発会議レー (Ladakh Autonomous Hill Development Council, Leh) 概要】

ラダック連邦直轄領のうちレー地区の行政を担う。地元民の選挙により選出された 30 人の評議員で構成される。ヒマラヤの高山標高 3000m 以上にあるという地理的な特異性の中で培われてきた文化や伝統を保ちつつ、外部との積極的な交流を通じて新しいものを吸収し、持続可能な社会の構築に取り組んでいる。未来のラダックを担う人材の育成に注力し、山岳エリアのモデルケースとなることを目指す。

【フォレストアートフェスティバルに至る背景】

ウォールアートプロジェクトはインド農村部の地域コミュニティと協働し学校を舞台にしたアートプロジェクトや国際カンファレンスを開催してきた。その内の 5 回をラダックで開催。日本人アーティストによる壁画制作デモンストレーションを子どもたちの目の前で進めつつ、音楽家や服飾作家、映像作家、ダンサーによるワークショップにも取り組んできた。共催団体はそれら取り組みを評価し、子どもに加えラダックのアーティストとの交流と協働を一層深め、文化分野の発展への寄与を要望。伝統が大切にされてきたラダックだが気候変動や貨幣経済の浸透により変化せざるを得ない状況にある。文化の力によって新しい局面を見据える視点がもたらされることが望まれている。

【2024 年以降の展望】

フォレストアートフェスティバル in ラダック 2024 以降も、ラダックとの交流を継続していく。2025 年には、ウォールアートプロジェクトが運営するアートギャラリー「ツォモリリ文庫」において、ラダックのアーティストの作品展やワークショップを予定している。植樹地にはアーティストインレジデンスが行える拠点が自治政府により建設される計画もあり、作品制作やワークショップが継続的に開催される。

アートが持つ自由さ、平等さ、人を繋ぐ力。そういったアートの力を信じてウォールアートプロジェクトはここまで進んできた。アートに森が掛け合わされることで、「場」ができ、森に植えたヤナギやワイルドローズはゆくゆくは地元の人々の暮らしに潤いをもたらす存在となり、来訪者をいつでも歓迎するパブリックスペースとなっていく。

また、このようなスタイルでの森づくりがモデルとなり、活用されることで、CO2 削減や地域の地下水涵養に微力ながらも寄与していきたい。

登壇アーティスト

浅井裕介（美術家）

生きることを変化することと捉え、土、テープ、ホコリなど、あらゆる素材を用い絵を描くことを追求し続ける。現地の土を使う「泥絵」シリーズを世界各地制作してきた。2017 年にラダックでの「アースアートプロジェクト」では、下記の作品を制作。今回の「フォレストアートフェスティバル」では、かねてから夢見ていた巨大地上絵に挑戦する。フェスティバルの期間限定で現れる布を用いた地上絵。「地図の上にピンを刺すように、ここに命があるよ、ということを示すような作品にしたい」と意気込む。

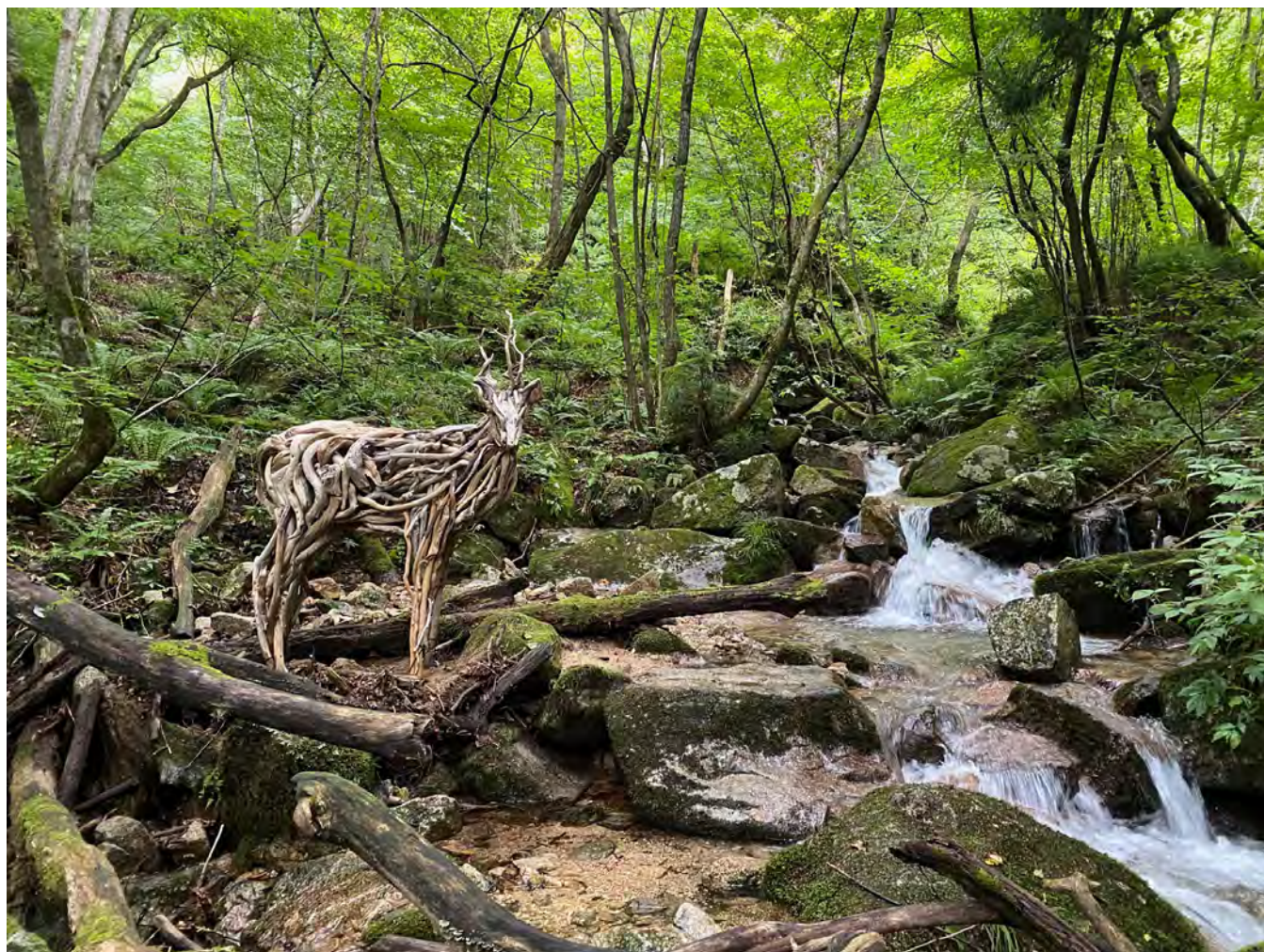


浅井裕介「泥絵：土の旅」2017

登壇アーティスト

富松篤（彫刻家）

木を削り、人物像を彫り出すことを続けてきた彫刻家・富松篤。数年前から流木の自然の姿に惹かれ、牡鹿半島の浜に移り住み、流木を素材として組み合わせ、「命」を宿らせることに挑み始めた。現在までに 18 体の等身大の生き物を制作。ラダックでは、やがてインダス川に流れ込む小川で流木を集め、植樹地を見守る存在としての立体作品を制作する。



登壇アーティスト

香川大介（画家）

「創る」ことを生活の一部とし、絵画を中心とした作品制作に取り組む。2023 年の「フォレストアートフェスティバル〜プロローグ」では、約 7m の作品「またここに還る」を 8 日間で制作し、喝采を浴びた。作品はマトー寺院の収蔵となったが「その時に描ききれなかったことがたくさんあるんです」と言う。今回は、前回滞在して見聞きしたことをベースにさらに体験を積み、全長 16m ほどの絵巻物作品を制作予定。



登壇アーティスト

スギサキハルナ（美術家）

2023 年の「フォレストアートフェスティバル〜プロローグ」ではラダックの土や顔料を用いて 5m の帆布に描く作品を二つ、ゲートを彩る作品も描いた。スギサキは、土、還元焼成・酸化焼成など、素材や焼成方法を使い分け、思い通りの作品を作る。今年、ラダックの顔料や土のリサーチを深め、陶芸家の窯を借りて陶器作品群を制作。日本の陶芸を伝え、植樹地に現れる精霊たちを表現する。



登壇アーティスト

花田千絵子（ダンサー）



パフォーマンス映像

https://youtu.be/_j87Hm6i7gc

ラダックには、現在も祭祀や催事ごとに村の男女がこぞって踊るラダックダンスが残っており、花田は、現地で村人たちからそれらのダンス学ぶことを渡航の目的の一つとしている。地元のダンスを体感することはその精神性を理解し、深い交流を促します。それらを学んだ彼女が、芸術祭当日、コンテンポラリーダンスとして披露する。日本で醸成された身体表現を伝えるべく、現地の子どもたちへのワークショップも予定している。

登壇アーティスト

RRyusuque (ハンドパン奏者)



演奏映像

<https://youtu.be/CqY1Ryy2xIM>

南米各地を巡る演奏の旅から帰国し、高知県の清流、仁淀川近くに移住し、その地をインスピレーションの源としているパーカッショニストである。現在もハンドパンを持ちながら、日本全国、世界で演奏活動をしている。

中でも、彼が手がけるハンドパンは、リズムと音律のある楽器であり、非常に繊細でありながら、奏でる人の人柄がそのまま反映されるような多様な表現力を持つ。

ラダックには、かつての日本の御神楽のように、村ごとに楽団があり、祭祀の折りには村人たちがパーカッションや笛を奏でる習慣がある。

RRyusuque は、それら地元の楽団の響きや、雄大なヒマラヤの風景とのコラボレーションを目指し、ハンドパン持参で渡航することが決まっている。

ラダックの土地と彼のハンドパンが出会った時、どのような化学変化が起きるのか。

芸術祭「フォレストアートフェスティバル」では、地元楽団とのコラボレーションはもちろん、その成果となる曲が作曲され披露される。

その曲は、日本とラダックの交流の証として、今後も繰り返し演奏されていく。

招聘アーティスト（キックオフイベントへの登壇はありません）

ウィエダ兄弟 (Vayed Brothers) *ラダックへ招聘

インド、マハラシュトラ州に暮らす先住民ワルリ族の画家。兄弟で制作するスタイルで、インド各地で制作した巨大な壁画が話題。ワルリ族のアイデンティティを深め、部族に伝わる神話や創世の物語をはじめ、現代社会を広く見渡し、メッセージを込めた作品を描く。日本での滞在制作経験もあり、日本人アーティスト、ラダック人アーティストと交流を深めつつ、ラダックの文化、暮らしの奥底にあるものを描き出す。



「源のあらわれ」
ウォールアートフェスティバル
ふくしま in 猪苗代 2023

ラダックのアーティスト（キックオフイベントへの登壇はありません）

フォレストアートフェスティバル・プロローグにて香川大介、スギサキハルナが 10 名のアーティストを招き、ワークショップを行った。スギサキは、ラダックで集めた土や、灰、煤を顔料として用いる方法、また、持参した日本画にも使われる顔料の使い方をデモンストレーションで伝え、作品を描いた。作品は植樹地に展示された。



参考資料

これまでのウォールアートプロジェクトの取り組みへの取材記事（日本経済新聞 2023年10月6日）

日本経済新聞

2023年(令和5年)10月6日(金曜日)

文化 40

文 化

学校の壁いっぱいアート

◇インドの農村や福島で芸術祭、10年超す◇ おおくに あきこ



教室の壁に描かれた浅井裕介「泥絵・祝福のダンス」(2011年)＝三村健二撮影

インド農村部にある学校の、教室の壁に絵を描く芸術祭「ウォールアートフェスティバル」が始まったのは2010年のことだ。小さな学校は壁いっぱいアートが出現したことで注目を集めた。仕事を手伝わせた親たちも、子どもを学校に行かせようと思い始めたようになった。新学期にはいつもより100人多い子どもが入学した。

活動を見て、別の村から自分たちの村にも来てほしいと言われた。こうして、毎年のようにインドで芸術祭を開くことになった。11年からは日本に逆輸入し、福島でも開催している。

最初は最も貧しいといわれる北東部ビハール州のニランジャナスクール。東京芸芸大学の学生が建てた学校だ。建てて終わりはしたくない。緑あふれる彼らとインドの子ども写真展を開いた時、芸術祭を思いついた。

立ち上げは私と、大学を卒業したばかりで、教師になる前に世界を知ろうとしていた「おかず」。



この浜尾和恵のたった2人。手探りで助成金を申請し、土で絵を描く美術家の浅井裕介さん、ババリック・アートを手掛けるインドのスリージャタ・ロイさんに参加を依頼した。

目指すのはかわいそう、な子どもに寄付金を集める芸術祭じゃない。面目い人がたくさんいる村や学校を広く知らせるための芸術祭だ。村人に自分たちが持っているものを、自分たちのことを発信してほしい。

ピンチは何度も訪れた。インドにいるおかずくんとはしばしば衝突し、やると言ったことをなかなかやらない現地の人は「もう一緒にやりたくない」とさえ思った。悪戦苦闘しながらも実現した芸術祭は、3日間

のべ4000人以上が来場する盛況ぶりだった。10年離れた村から子どもや赤ちゃんを抱っこして歩いてきた母親には感激したし、絵の前で楽しそうに色々な感想を口にする子どもたちの姿はまぶしかった。

翌年、2回目の芸術祭が終わった時、東日本大震災が起きた。私たちが心配し、いつまでも家に滞在していたと申し出てこれる現地の人に、この2年で生まれたつながりの深さを感じた。

貧しい中、募金活動をしてくれた村の子どもたちの想いを福島の人々に伝えたいと思った。おかずくんの出身地である福島県郡山市での報告会をきっかけに、猪苗代町で毎年11月に開いている芸術祭も6年目だ。

フルリ画とよばれる民俗画が有名なワルリ族に呼ばれたのは2年目のことだった。彼らは農業をしながら農閑期に絵を描いて暮らしていた。

土地を愛し、神様に祈り暮らす彼らのもとにも資本主義は容赦なく訪れていた。出稼ぎに出たり、二束三文で土地を売ったりして困窮化する人々。

「生徒に未来のビジョンを持つ大切さを伝えた」と話す現地の先生の言葉を聞き、私たちの芸術祭はぴったりだと思った。現在では若手アーティストが国際舞台で活躍し、自分たちの文化を発信するまでに成長した。

標高5000級のラダック地方の村では「教育を受けた遊牧民になりました」という少年の言葉に心打たれた。しかし、地球温暖化の影響で根雪が減り、地下水脈が変動し、家畜や作物が育てにくくなっている。芸術祭は、その現状を発信する目的もある。

6月には日本のボランティアと植樹をしてきた。2024年、木の間に日本とインドのアーティストが作品を展示制作する「フォレストアートフェスティバル」を開く予定だ。(NPO法人ウォールアートプロジェクト・アートディレクター)



フォレストアートフェスティバル in ラダック 2024 キックオフイベント プレスリリース

2024年5月20日

取材・問い合わせ先

Eメール info@wafes.net (おおくに・浜尾)

電話 090-2328-0230 (おおくに)

公式ウェブサイト <http://wallartproject.net>